

源氏物語のよみ方Ⅱ（99・3・18）

秋 山 虔（昭18・文丙）

昨年11月、源氏の中身に入る前の前置のようなことで一時間お話をしました。日本の近代の文化を推進したといってもいいような、内村鑑三、高山樗牛それから正宗白鳥といった知識人達が、源氏に対して非常に否定的な見解を述べていましたし、和辻哲郎もそうでしたが森鷗外のような人も源氏がいだったようです。それから戦争中、昭和一〇年代は源氏の受難の時期でした。谷崎源氏が出ましたがそこには大変な削除があるのです。これから申し上げる藤壺問題というのが全部削除されています。藤岡作太郎先生、この方は三高教授（明30〜33）から東大の助教授になって助教授のまま亡くなられた方ですが、平安朝文学の權威で、その方の『国文学全史、平安朝編』は、古典的な名著です。それには改造文庫版がありまして、私が三高の生徒のときにこれを購入したのですが、源氏関係のところは至るところに、何行削除、何字削除というのがやたらにあるのです。というのは、

それをあらわに書いたら不敬罪に当るのです。つまりこれから申し上げますように、天皇のお后を皇子が犯して子供を産ませて、その子供が天皇になるというわけですから、これはもう皇室の尊厳に対する冒瀆となります。しかし、不思議なことにそういう源氏物語が、中世においては天皇家によって伝承されてきたのですから、近代における天皇観というものは、権力によって作られたと考えてよいのではないかと思います。それはそれとして、そういう問題がいろいろあつて大変面白いのです。この五月ごろになるのですが、近世から近代・現代にかけて、源氏がどう読まれて来たかということを、いろいろの資料を集めて、「批評集成源氏物語」全5巻を、ゆまに書房から出版します。それには近世から現代までの源氏の評価、それも研究者よりも一般の評論家とか学者とかそういった人達の見解をも体系的に集めました。

前回は、中身にもちよつと入りましたが、前置としてもいろんなことがありました。自分全財産を投げ打って源氏物語を国民の前に隠蔽してみせるなどと言った国文学の大家もありました。一方、国定の小学国語読本六年生に源氏物語が入っているのを絶対に許せないと言ひ出した学者がおりましたが、それに抵抗して遂に削除にはならなかったという例もありまして、そのころ文部省にもそういう硬骨の役人がいたのです。その他いろいろありますが、そういうことは今日は申しませんで源氏物語の中身に入りたいと思います。

源氏物語の世界そのものも、かなり取っつきにくいということを先ず申上げておきたい。物語の主人公の光源氏への共感のしがたさというものが、ずいぶん多くの人からこれまでも言われて来ております。とにかくリアリティがない、光源氏のような人物は、地上の人間とは考えがたい、ということは随分言われてきました。実はこんな人がこの世の中に生れてきていいものか、といった驚きに迎えられて、源氏は物語の世界に登場してきたのです。まあ前世の因縁だろうとしか考えられない。どうしても現実の論理では説明できない、ということ語り手自身が言っているのです。どんなに源氏を憎んだ人間でも、源氏を見れば頬がゆるんでくる、相好をくずさずにはいられないような、そういう美貌、それから学芸、技能の万般にわたって超一流なのです。これは女性関係ですけれども、底知れない情愛の持主なのです。これからも、そのことについて申すわけですけれども、同時にこの人物は卓越した政治家です。人心収攬術が格別です。そういう源氏の特性を列挙していったら、とうてい統一的な個性としては考えがたい。そういった見解は、かなりの研究者によって言われて来ました。

それから、皇子で臣下に下って源という姓を賜ったので、これは賜姓源氏とか一世源氏とか言われているのですが、その一世源氏が物語の世界にもうけられた政治の世界で、権力を握っていわば摂関家的な存在として栄華を手中に収めるということも、当時としては

あり得ないわけです。そういう皇統の人達というのは、権力は奪われていきます。藤原氏の権勢によって、むしろけ落されていってしまう。そういう経緯を考えると、光源氏はその点でもリァリティがないのです、和辻哲郎さんの名著である『日本精神史研究』、この前にも申しましたけれど、このなかに「源氏物語について」という名論文があります。大正十一年に書かれたものです。そのなかで、もし現在のままの源氏物語を一つの全体として觀賞せよと言われるならば、自分はこれを傑作と呼ぶに躊躇すると言っているのです。

また光源氏は一つの人格として描かれていない。その心理の動き方は、何の連絡も必然性もない、荒唐無稽なものである、というようなことを言っております。この和辻さんの考へでは、現在の源氏物語以前に光源氏物語というのがあっただろう、好色人光源氏を主人公とする伝説、あるいは物語とでもいわれるそういうものがあって、それがかなり好評だったのだろう、そうしたいわば光源氏物語を土台として、重ね写真が作られるようにして紫式部によって書き継がれていって現在のような源氏物語になった。そう推定することによって、光源氏の人格としての不統一性も合点されるということです。このような和辻説は源氏物語の成立過程についての論議の糸口をなしたわけですが、現在も決着には至っていません。しかし私は、成立過程がどうあろうとも、作者は現在のような形の源氏物語を仕上げるこのことによって光源氏像というものを完結させたわけですし、当時の読者はもとより、

現在に至るまでの読者もこういう形での源氏物語を読むことによって光源氏のイメージを作り上げてきているわけです。むしろ私達は、近現代的な目で見たときの不統一性を、それこそ古代物語の主人公の見事なありようだという視点を設けるべきだろうと思います。大体古代物語の主人公は、それが成立した時点においても、普通の日常的な現実の尺度の通用しない存在だったといえます。ごく普通の人間と等身大の日常的な存在であつたら、後々までこれを語り伝えていく必要もないわけです。容易に共感し難く異常であつて、これは一体何ものだ、という関心を寄せざるを得ないということで、物語は伝承されていくわけです。源氏も例外ではないのであつて、光源氏がありとあらゆる美質を超現実的に付与されているということは、そういう物語の伝統的な約定に従うことによって、そのような人間像が仕上げられていったといつてもよいと思います。そういう主人公について不統一である、一人格ではないという批評は筋違いだという感じがします。例えば日本武尊の伝承なんかをみますと、これは乙女のような初々しい美しさを持っています、ですから女装したら熊襲武がとろけてしまつてそれで殺された。その日本武尊が一方兄さんを厠の中から引きずり出して、手足をもいでしまつたという獰猛さなのです。そういういろいろな面があるのです。また東国遠征した帰りに、非常にセンチメンタルになつて、伊吹山で死にますが白鳥になつて都に帰つて行くという、色々な伝承を継ぎ合せたトータルがその物

語の主人公なのです。そういうものに対して、近代的な個性があるかないかという尺度でみていったら、これは筋が違うという感じが致します。

和辻さんは光源氏の女性遍歴についてこう述べています。

「何人も認めるごとく、この物語に現れる主要な女の多くは愛人の独占を欲する。そこから彼等の苦しみが生ずる。如何に一夫多妻が公認せられた時代でも、恋に内在する独占の要求は如何ともしがたい、従って主人公の源氏は、恋人の各々に対して独占の要求に応じる態度をとらなくてはいけない。しかも作者はこの主人公を、口先だけの優しい女たらしとしてではなく、真心から恋する男として描こうとする。従って、恋人の数を増やすとともに、主人公の描写は困難の度を加える。現在の源氏物語は、この困難に押しつぶされている」。こういう文章に続いて、前に申しました源氏の一つの人格として描かれていない、という文言が続くわけですが、果して光源氏はこの困難に押しつぶされているのかどうか。やはり、近代的な目と心を引込めて、源氏物語の向う側に廻ってみたらどうだろうと思うのです。そうすると当然、光源氏の前身ともいふべき伊勢物語の主人公が想起されます。昔ありし男として登場する在原業平を核とする主人公です。伊勢物語というのは流布本で百二十五段、その大半は男女の関係が語られているわけですが、この百二十五段を、もし相互に緊密な前後関係があるものとして読んでいったら、この主人公は全く

支離滅裂になると思います。ところが、伊勢物語というのは、どの段も「昔男ありけり」と語り起されて単独に一つの話が語られていて完結するわけです。互いに話が独立している。つまりいわば断絶した関係で話が連続しているのです。従って、昔男は非常に多様な相手とかかわりつつも、常にそれが一回的、全身的なのです。そうした話の主人公の総和として鮮烈な人間像が仕上っている。この主人公の女性関係に、実際の男女関係を読んではいけないだろうと思います。むしろ時世に背を向けて、世俗の掟から自分自身を疎外して自由な精神の領域を開いていこうとする生き方であって、和歌という非日常的な言語によって人間の連帯が求められていく、これが歌物語といわれる伊勢の急所だろうと思います。光源氏をそのような伊勢の主人公の直系のよみがえりとしてとらえるときに、彼が一つの人格であるかどうかなどという近代的な議論は無意味であることはいうまでもないと思います。しかし、源氏と伊勢との違いは、これまた歴然としております。伊勢の主人公の昔男についてはここで具体的に論ずる余裕は無いのですけれども、例えば「東下り」という話があります。京にはあらず、平安京には住めない、東国に生きる道を求めて行くのだといって、さつきと東下りをして行くのです。つまり、平安京の官僚組織の中に組込まれることを拒否して放浪の旅に出ていく。「初冠」（ういこうぶり）の段もそうなんです。「初冠」というのは大人になって冠をかぶることです。大人になると、当時の貴族は官僚

として生きる以外の道はない。ところが平安京の官僚組織のなかに組込まれることを拒否して奈良の都に向いて行くのです。そしてそこで女はらからを見いだして、歌を詠みかけて、彼女らとの連帯を求めてゆくのですが、つまり伊勢の主人公は反社会的、脱政治的といましようか、非常に明快です。ところが光源氏の方はどこまでも、宮廷政治のまっただ中ではがいじめに締めあげられている。そういう人生を余儀なくされているといえます。つまり、世俗の世界に縛り上げられている存在であるということと戦いながら、独自の道を開いていくというのが光源氏であろうと思います。

最初の光源氏の人生の開始の語られるのが「桐壺」の巻ですが、その母のいわば横死ともいべき死に方がると語られていることに注意したいと思います。ある帝（ミカド）の後宮で、桐壺更衣がその身分からすれば常識に反するような形で帝の寵愛を独占し、そのためにかえって同輩による陰湿な迫害をこうむって死に追込まれていった、そういう経緯なのです。いったい後宮の世界は単に帝のわたくしの世界ではなくて、そこに権勢を競い合う上層貴族達の切実な願望が注ぎ込まれるるつぼであつたわけです。桐壺更衣は父の大納言の遺言に従って入内（じゅだい）させられたのですが、バックアップする勢力がないのですから、決定的に不利な状況にいたわけです。ところが、父の願望が実現して、帝の寵愛を獲得するということになったのですが、これは物語の世界のなかの現実におい

ては許されるありようではなかったのです。もし、仮に帝と桐壺更衣との仲らいが願望通りにそのままだでなく完結するのであったら、現実感は大変希薄になります。むしろそのような関係ができあがったときにはもうそこには滅びの気配が忍び寄っていると考えた方がよいのです。いわば帝と更衣との関係は、死に向って貫かれていった異常な愛だったといえましょう。その愛の形見として誕生して来た第二皇子光源氏の前には、やはり母を死に追込んだ現実の壁が立ちはだかつている。ですから前に申しましたように、源氏が万般の超人間的資質の持主であるということは、これは古代物語の主人公の約束事だとは申しましても、そういう資質、能力があつてこそ源氏は世俗の圧迫をはねのけて生きることができたのだいえます。帝はこの優れた皇子を跡継にしたいと願うわけですが、しかしそれが願望だけにとどまったのは余儀ないことで、権勢を誇る右大臣の娘で、弘徽殿女御（こきでんのようにこ）という人を母とする第一皇子（朱雀院）を差しおいて、後見のない第二皇子の源氏を東宮にするなどということは、世論が許すはずがないわけです。そこで源氏は臣籍に降下して源の姓をを賜えるということになるのですけれども、最愛の皇子を皇室家族圏の外に押出して臣下の列に加えたというのは、王位継承権を保有する親王身分の危うさが懸念されたからです。王位継承権を持っているが故に、古来どんなに多くの有能な皇子達が抹殺されたか。万葉集で有名な有馬皇子だとか、大津皇子だとか、王位継承

権を持っていたがゆえに、体制側から排除されることになった。長屋王は長屋親王と呼ばれていたようですが、このお方も王位継承権を持っていたので、そういう存在は体制にとっては危険なのです。ですからそういう目立つ存在はどんどん抹殺されていきました。光源氏はむしろ王位継承権を剥奪されることによって安泰な道を歩むことができるであろうという帝の配慮から臣籍に下ったといっているわけですね。光源氏は十二才の年に元服しまして、左大臣の娘の葵の上と結婚します。というよりも、帝と左大臣との談合によって結婚させられたというべきでしょう。葵の上の母は帝の妹宮です。源氏と葵の上はいとこ関係にありまして、互いに身分素性は申分なく釣合っています。源氏は左大臣家という権門の支援によって地位は安定し、左大臣家としては帝との身内関係を強化することによって第一皇子の後見である右大臣家の権勢を凌ぐことになったと語られています。源氏は自身の意志願望などとはかわりなく、宮廷政治の仕組の中にとりおさえられていると言っていると思います。葵の上との夫婦仲というのは、心の交流は最初からございせん。これは高飛車にそういう関係に据付けられたといってもいいわけで、これは勿論源氏の幸せを願うことなのですけれども、源氏にとって葵の上は、お互いに慕いあい、愛しあうという関係にはないのです。実はそういう源氏の心を占めているのは、亡くなった母桐壺更衣に代って帝の最愛の后となっている藤壺の宮という人への切実な慕情でした。そのこ

とと葵の上との関係の冷やかさとが表裏の関係になっているのです。藤壺に対する源氏の慕情というのは、極めて自然に培われたものです。というのは、藤壺という人は、源氏の母の桐壺更衣を亡くしたあと、政治を放擲してただ悲しみに沈んでいる帝のもとに、先代帝の内親王で、桐壺更衣と生写しのお方がいるという情報もたらされて、それではというので後宮に迎えられたのですが、その藤壺が母更衣と生写しだということになれば、源氏が亡き母への慕情から、藤壺に親しんでいくのは自然のなりゆきです。ところがその自然なありかたが、実は帝への裏切りになっていくということなのです。やがて二人は密通して、表向きは帝の皇子であり、源氏の弟である冷泉院をもうけることになるわけです。考えてみれば、帝の反秩序的な愛の形見として生を受けた源氏は、この父帝の情熱を、父帝へのこれは恐るべき裏切りという形で受継いでいる。この罪は絶対に隠蔽されなくてはならないのですから、二人は二度と交わる機会をもつことができません。光源氏の女性遍歴というのは、藤壺に対して激しく慕いながらも決していやされることのない渴望が底流しているといえましょう。光源氏は伊勢物語の昔男のよみがえりであるということを申しましたけれど、しかしながら昔男との違いは、複雑な諸状況を余儀なく背負込んで、それとの格闘において生きて行く点にあります。いわば昔男業平を断然引離す形で、源氏は昔男を引継いでいるといえるわけです。光源氏と藤壺との間にもうけた冷泉院が、やがて東

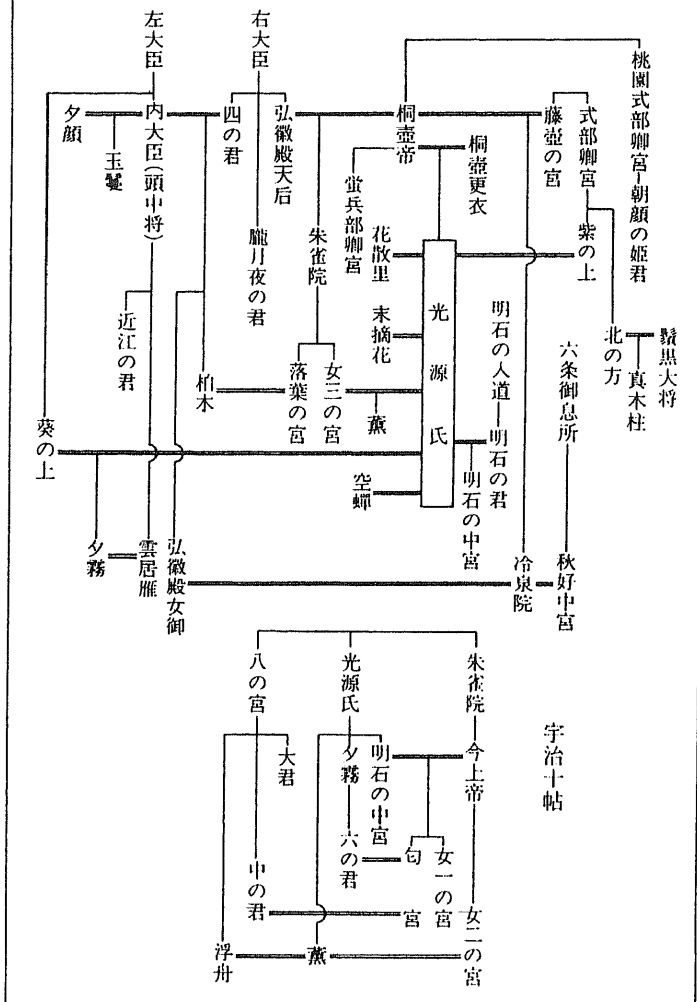
宮になります。帝は光源氏を跡継にできなかったその無念さを、冷泉院を跡継にすることによって晴そうとしたのです。やがて冷泉院が帝の位につくと、その後見（うしろみ）として重んじられた源氏が、冷泉院の母后になっている藤壺と協調して、卓越した政治家としての能力を発揮し、強固な体制を確立することになります。源氏は藤壺と共有した秘密によって、無類の栄華を手中におさめるわけですが、しかしながら、その栄華を誇らかに享受できないばかりか、そのことへの恐れから免れることができない。その土台が藤壺と共犯した罪にあるのですから、源氏は常に自分の栄華というものを恐れているのです。繁栄すれば繁栄するほど、後生における報いが恐ろしい。ですから嵯峨野の、今の清涼寺と言われているところにお堂を造って、そこで勤行をします。仏の前で自分の償いをしようと、月に二度仏に仕える生活をしたと語られています。

源氏は三二才の年に藤壺に先立たれます。その後冷泉帝から自分が実父であるということを知られてしまいます。これはどうして知られるかというと、藤壺に護持僧がいました、そのお坊さんに藤壺は源氏との秘密を告白していたのだろうと思いますが、このお坊さんが墓場までその秘密を持っていったら大変だという気になるわけです。父の源氏が子である帝に対して臣下として仕えるという背理をどこまでも隠蔽しておくわけにいかないという考えから、帝に秘密を告白します。驚いた帝は、実父を臣下として仕えさせるそう

いう道理に反するような現事態を憂慮して、源氏に帝の位を譲ろうという意向をもらされるのですけれど、源氏は固くこれを辞退して、結局は準大上天皇という地位におさまるのです。大上天皇というのは上皇のことで、天皇が退位すれば上皇なのですけれど、源氏は天皇ではないので、上皇に準ずる位というものを得てそこにおさまるわけです。そしてそのステータスシンボルとでも申すべきでしょうか、六条院と称される、今の坪数でいえば二万坪位になりますけれど、春・夏・秋・冬という四季の町からなっている四町四方の大邸宅を造ります。季節の循環の秩序を空間化して、そこでは天皇も追隨しえないような地上の極樂を作り上げるのです。しかし、こういう体制を作り上げた源氏は、その体制が無類であればあるほど、今度はこれを保持して行く苦勞に耐えなくてはならないわけで、この世界の秩序を維持するための掟に、彼自身が苦しく縛り上げられるということを如何ともしがたいのです。しかも時代が押し移って源氏の庇護下に育成された次の世代が、やがてそれぞれの生き方を主張して、物語の世界で主役を演ずるようになります。そうすると源氏は、もはや自分自身が中心となって世界を開いて行く主人公ではなくなってきました。ごく簡単な系図を一八九頁に掲げました。こんな系図では実感をお持ちになれないでしょうが、こういう関係なんだということを見ていただきたいと思います。

三部作として読みとることが定説となっていていい源氏物語の第一部というの

源氏物語主要人物系図



は、第三十三帖の「藤裏葉」の巻において、冷泉帝と朱雀院がうち揃って六条院に行幸するという儀式をもって終結するわけですが、第三十四帖「若菜上」巻に始まる第二部以後、光源氏のありよりの顕著な変貌は、無惨の極みというべきだろうと思います。第二部になりますと源氏の世俗的繁栄は以前にまさって確固たるものがあります。これは「藤裏葉」の巻という今申しました第三十三帖で、源氏は唯一の娘、——これはかつて朱雀帝の時代に、右大臣一派の陰謀もあって、源氏は都から退去して須磨明石の地に流離の生活を余儀なくされたわけですが、明石の地において、前播磨守の娘である明石の君と関係を持ちまして、その腹に、明石の姫君と呼ばれる女子をもうけました。当時、上層貴族の家で女子が生まれることは大変なことでした。その娘を天皇家に入れて皇子が生まれ、その皇子が天皇になれば、その家は栄えるのですから。源氏は明石の君のお腹にもうけたたった一人の姫君を東宮に入内させましたが、「若菜上」の巻で、その腹に東宮の一の御子が生れます。この御子は東宮が帝に上ったときには東宮になって、やがて帝になるでしょう。すると源氏一門の繁栄というものは未永く約束されることになる。しかし、そのような喜びにもかかわらず、六条院の世界は源氏の本意に反して、どうにもならない矛盾を抱え込んでしまうことになります。

いったい源氏はこれまでの長い歲月、藤壺の宮の形代（かたしろ）、代役ですが、その

姪に当る紫の上を妻に迎え入れ、理想的な北の方として重んじていた。苦楽を分か合う人生を共に歩んできました。この紫の上を迎え取る話は、「若紫」の巻に書かれておりますが、源氏は、その紫の上を通して藤壺への思いを常に満たそうとしていた。ですから源氏と紫の上との関係というのは、他の女性と比べて特別なのです。六条院の秩序も、光源氏と紫の上との信頼と愛情とを機軸として保たれていたといえます。明石の君のところに生れた姫君を、東宮に入内させることができたのも、この明石の君のような身分の低い母親では困るというので、紫の上の養育によって后候補者としての教養を身に付けさせて、そして東宮に入内させた、そういう経緯があります。その紫の上と源氏との、それまでは絶対的と思われた関係がひび割れて来るのです。というのは朱雀院上皇の皇女である女三の宮が六条院に迎え入れられることになったからです。そういう事態が、いわば源氏の関知しないところで、そうなるより他ないというふうに仕組まれて、物語が語られていくわけです。これが「若菜上」の巻なのですが、「若菜」の巻というのは上下合わせて源氏物語の全分量の十分の一、大変な長い巻なのです。というのは源氏と女三の宮との結婚はかなり異常な関係です。源氏が四十才で女三の宮が十三四才です。その経緯が、そうなるよりほかのないような形で克明に仕組まれていく大変な巻なのです。ですから「若菜」の上下巻というものを山にたとえれば頂上なのです。頂上に登って行くのが大変でも、登りつめた

ら後で下って行くのは容易だといえるかもしれません。源氏は身動きもとれないようなかたちで女三の宮を迎え入れることになりましたが、女三の宮はあたかも女御として入内するような大々的な儀式でもって六条院に入って来ます。朱雀院の最愛のこの内親王は、父院の莫大な資産を相続しているわけですから、光源氏の経済力は一段と増したはずです。女三の宮の母は朱雀院の後宮で藤壺と呼ばれていた女御で、すでに故人ですが、源氏が慕ったあの藤壺の妹なので、源氏の心の中に女三の宮のなかに藤壺の面影を求めようとする氣持が動いていたということは確かですが、源氏にとっては、あの大々的な六条院を経営するのには大変な経済力がなければならぬわけですから、女三の宮が朱雀院のほとんど全財産を背負って興入れしてきたことの意義は無視できませんでしょう。ところが、光源氏には多面的な女性関係があるわけです。それなのに朱雀院が女三の宮を光源氏のところには嫁がせたのは、女三の宮が光源氏から一番大切な妻として優遇されるだろうというもくろみからでした。しかしこれは完全に狂ってしまったのです。

ところで、女三の宮が六条院に興入れして来ることに對して、紫の上が平静でいられないのは当然であります。女三の宮はいま申しましたように、藤壺の宮の妹宮を母にしている。紫の上の父の式部卿宮というのは、やはり藤壺の宮の兄ですから、女三の宮も紫の上も同じく藤壺のゆかりの人ですけれど、女三の宮はれっきとした内親王です。紫の上の方

は式部卿宮がひそかに通つて行つた女性のお腹から生れているのですから身分的に格が違ふのです。そんなわけで紫の上は、これまでのほとんど絶対的であつたといえるような自分の地位の揺るがされる事態に絶望するほかないのですけれども、さりとてここで取乱すことはその誇りが許さないので。源氏に協力して女三の宮を迎え入れる、心から歓迎するかのように振舞うわけです。その態度がいかに計り知れない苦痛に耐えるものであるかを源氏は知つて、今更ながら今度は紫の上に対する執着を深めて行きます。そういう源氏の心の動きは、一方、迎え入れた女三の宮が直かに接してみれば、実に張合いがなく魅力の乏しい女性であることへの失望と、表裏しています。源氏は今はよりすぎるようにして紫の上をいたわつて、自分の愛が変らざることを訴えるのですけれども、さりとて朱雀院の手前女三の宮の処遇に怠りがあることは許されないわけです。一方を立てれば一方が立たない矛盾を、その場しのぎに取繕うほかない源氏ですけれど、紫の上の方はまさに毅然として誇り高く、知恵分別を行使しながらそれまで最も重んじられて来た立場を崩すことなく守り抜いたといえましょう。

女三の宮の興入れという事態のほかに、紫の上の心を波立たせたのは明石の君という存在なのです。明石の君は、源氏一門の末長い栄華のための切札となつた姫君をもうけているのです。その身分の劣りゆえに姫君の養育は紫の上に委ねられることになつたのです。

れど、姫君が東宮の妃として時めいて、一の宮を初め続々と男女の宮達の母として重みを増すときに、如何に身の程を自覺して謙遜に徹しようとしても、明石の君の生みの母としての存在感是否定すべくもないのです。紫の上に源氏の子が恵まれなかったことは、これは源氏一門にとって無念なことですし、当の紫の上にとっては、そのこと故に明石の君に對するこだわりをうちあらうことができない。つまり、紫の上は明石の姫君を養育した功績があるのですけれども、あくまでこれは義理の母親としてなのです。生みの母親がだんだん六条院の世界に根を下ろしてくるとき、紫の上はあがめられればあがめられる程、浮上がつてくる。その心の中の寂しさをどうにもならないのです。現世を見限る紫の上は、後生の安養を願って出家を望むのですけれども、しかし紫の上に対する愛着の日増しにつる源氏にとつては、紫の上を出家させるなどとても許せるものではない。いったい源氏と紫の上は世間的にはまれにみる理想的な夫婦といえるけれども、それぞれの決して通じ合うことのない心の落差というものは、痛ましいというほかないでしょう。

「若菜下」の巻に語られている女樂というのがあるのですけれども、これは文字通り空前絶後の催しでありまして、六条院の女性たちが一堂に会して得手の樂器を演奏し、妙技を競う一夕でした。それぞれの女性が専門の樂師といえども追隨できないような伎倆を披露する大変なフェスティバルでしたが、この催しによって六条院文化というものがどれほ

ど、高度なものかということを誰もが実感しました。紫の上がその演奏会の直後に発病するのです。そして六条院を去って二条院で養生することになりますが、紫の上が六条院を去るということは、六条院の世界が崩壊過程に入ったことを意味しました。一時息絶えた紫の上は必死の加持祈禱によって蘇るのですけれども、もうこれは癒えることのなく一進一退する病です。心筋梗塞症のようなものだろうと思いますが、そういう紫の上を源氏は一所懸命に看病するために六条院が留守がちになった、そのときに女三の宮は、以前から思いを寄せていた、これは柏木という源氏の義理の甥になりますけれども、その男に迫られて身を許すことになり、そのために身ごもってやがて男の子、宇治十帖の主人公になる薫を産みます。国宝源氏物語絵巻に「柏木」の巻に絵が三面あるのですが、三番目の画面は光源氏の姿を前面から描いた唯一のものであって、いろいろなところでご覧になる機会があります。薫の生後五十日の祝宴において、首を垂れ身を屈して自分のおおかりかと思ひますけれど、薫の生後五十日の祝宴において、首を垂れ身を屈して自分の子でない自分の子を抱いて眺め入る源氏の姿が描かれています。源氏は若き日の藤壺との過ちの現世における因果応報だと思つてゐるのです。藤壺と共犯した罪故に、来世にどのような過酷な報いを受けねばならないか、そのことを恐れていた源氏なのですけれど、しかし来世を待たずに現世においてこの苦杯を喫することになったのですから、来世の罪はこれで多少は軽減されるだろうかとまで思つてゐるのです。極上の栄光を生きていた源

氏が凄絶な苦悩を抱え込まれるこの第二部、これが「若菜」上下、それに続く「柏木」の巻なのです。そこに語られている源氏の苦悩について、かつて超人間的な存在であった源氏が人間的になったなどと簡単に言ってしまうわけにはいかないでしょう。準大上天皇という地位にある源氏にとって、女三の宮というのはその身分地位にふさわしい正夫人なのです。源氏の勲章だといっていいその女三の宮が、源氏に密事を知られたことを思い悩んで、薫を産んだ直後に出家するのですが、源氏が若い尼姿の正夫人を六条院の春の町に住まわせるということは尋常ではありません。薫の実の父柏木はこれまで源氏の最も親しく重んじていた側近者なのですけれど、あたかも自死するかのように世を去っていきしました。死ぬよりほか自分には救いようはないのだという思いから死んでいったのです。そういう身辺の異常事態もさりながら、源氏自身の苦悩は普通の人間のそれを越えているのでありまして、その巨大な深刻さというものは、超人間的異常人であることと見合うものだといえましょう。

源氏物語の世界のなかに、源氏自身が自分の人生について口にして言っている言葉として、或は心中に思っていることとしていろいろの記事があります。「薄雲」の巻だとか、「若菜下」の巻だとか、「御法」（みのり）の巻だとか、「幻」の巻だとか、いろいろの巻で源氏が自分の人生を回顧しています。例えば「若菜下」の巻で紫の上に向かってこういうことを

言っているのです。自分は幼少から常人とは違う境遇を生きて来て、誰しも追隨し得ないような栄光を享受して来たけれども、しかし一方でこの世でまたとなく悲しい経験を重ねた点でも人並はずれていた。かけがえのない大切な人々に次々と先立たれて、取残された晩年になっても不本意な悲しみは尽きない。道理にもとあるまじきことにかかわったにつけても、これは藤壺との関係ですが、どうしてそういうことになってしまったのか、我ながら納得のいかない苦しみを抱えて、どこまでも憂愁にとりつかれた身の上として、これまで過して来たのだから、このことと差替えというべきか自分が思っていたこと以上に、これまで生きながらえていることができているのだろうと自覚せずにはいられない、というようなことを言っているのです。これは光源氏の言葉を意識したわけですが、例えば、紫の上の死後の源氏を語る「幻」の巻でも、親しい女房に向って、自分は何一つ不足のない高い身分に生れていながら、また一方では誰よりも格別に不運の身であったという思いの絶えたことが無い。この人生のはかなくうきものであることを悟らせようとして、仏などがそのようにお決めになったのだろう。そうした仏のご意向を強いて無視して、俗世に生き長らえて来たために晩年になって悲痛な結末を経験することになってしまった。自分の宿運というものを見果て、器量の限度を見極め、それで氣も楽になっているのだから、今こそいささかの妨げもなく出家できるはずなのだけれども、ところが誰彼と別れ別

れになる段になると、今より一層心が乱れるに違いない。なんと頼りないこと、あきらめの悪い根性よ、というようなことを言っているのです。こういう源氏の言葉は決して場当りの述懐ではないので、源氏物語の世界を冒頭からずっと読んできますと、まさにいま源氏が述懐したようなことが実感できるわけです。人生の始発において、藤壺への思慕を培って絶対に許されない仲らいへと進んで、その結果として無類の栄華と悲慘を生きた、そういう人生は誰の共感も追隨も許さないものであったといえましょう。

源氏の研究に古来準拠研究という領域があります。これは何かと言いますと、物語の中の人物や事件或は行事などについて、実際の史実、或は伝承、前例などに当てはめて理解される場合、それらを指して準拠と称したわけです。モデルとは違います。例えば桐壺の巻で朝鮮から相人（そうにん）、人相を占うことのできる学者が渡日したわけです。帝は光源氏の将来について占ってもらったわけですが、そのときに「宇多の帝の御戒（いましめ）」があるので、その相人を宮中に迎えることをしないで鴻臚館（こうろかん）これは迎賓館、鴻臚館の跡というのが京都にあります、そこに源氏を素性を隠して派遣して将来を占ってもらった、という記事がある。「宇多の帝の御戒」というのは「寛平（かんぴょう）の御遺戒」といって、今でも読むことができるのですけれど、宇多天皇が退位するときに十六才で天皇になったまだ若い醍醐天皇に対しての教訓を何箇条か書いて与え

られたものです。その「宇多の帝の御戒」があるので、源氏を鴻臚館に遣わしたということになりますと、帝は醍醐天皇だと考えざるを得ないわけです。そうすると、醍醐天皇の皇子である誰に源氏が相当するのか、古注釈では源高明（たかあきら）という人物が指示されるわけです。高明は醍醐天皇の皇子で臣籍に下って左大臣にまで昇進したのですけれど、安和（あんな）の変というのですが、藤原氏の陰謀にはまって謀反人に仕立てられて太宰府に流される人なのです。安和二年（九六九）のことです。一世の源氏で左遷された人物は後にも先にも源高明ただ一人です。光源氏が朝廷に対して異心ありとの理由から須磨明石の流離生活を経験せざるを得なかったということと対応するのです。しかも高明という人が藤原氏の九条家の右大臣師輔（もろすけ）の婿であったために、同じ藤原氏の別の系統、小一条とか小野宮（おののみや）流とかいう家があるのですが、その藤原家の対立関係に卷込まれて失脚した、それと同様に光源氏も左大臣家の婿になったために、左大臣家と対立する右大臣家の謀略によって追放された、そういうことが非常に似ているのです。ところが一方高明の母であるところの源周子（しゅうし）は更衣でしたが、高明のほかに多くの皇子、皇女の母となっておりまして、桐壺の更衣のような悲運の人ではなかったわけです。従って源高明が光源氏の準拠であるということは、その事跡に共通するところがあるということなのであって、所謂モデルという意味に解すべきではないのです。物

語の様々の場面、諸段階において、光源氏は歴史上の実に多くの実在人物の面影を思い起させるのです。具体的には申しませんが、大津皇子、聖德太子、嵯峨天皇、源融（とおる）、小野篁、在原業平、在原行平、菅原道真、それから作者紫式部と同時代の人として藤原伊周（これちか）、道長、という人達が数えられるわけです。高明だけを光源氏と直結させるのではなくて、今申しました人々のイメージを源氏の経歴のあれこれのなかに読みとることができます。ことに須磨明石の流離の生活の後に都に帰還した源氏は、摂関政治の立役者のように栄進して、支配体制を確立するわけですが、そういう源氏の姿には、紫式部が身近に仕えた藤原道長の面影が投影しているということになります。作者は道長によって完成した摂関政治の時代に至るまでの日本の歴史のなかでの非常に顕著なしかも明暗の顕著な人物達の、事跡あるいは伝承を重ね合せることによって、イメージの総和とでもいえるべき光源氏の人生を作り上げたといえるわけです。ですから、紫式部日記によりますと、源氏物語が女房によって音読されるのを聞いた一条天皇は、「この人は日本紀をこそ読みたるべけれ、まことに才あるべし」という感想をもらされたということです。天皇はいかに伝承や史実によって裏打されているかということを含点しながら、源氏物語を享受したと言えます。光源氏は彼自身の述懐にも読まれるように、ことに晩年は凄絶な苦悩を抱え込んで、やがて出家への道を歩むことになるのですけれど、このような主人公が

史実や伝承を重ね合せて実在感をたたえる世界を生きる巨大な人間像であるが故に、迫力ある現実感をもって私達に訴えて来るだろうと思います。

源氏物語を読むのには原文によってディテールを追い、それとの格闘をしながら、行間の意味を汲みあげてゆくということが大事なのです。例えば瀬戸内寂聴さんの源氏物語が二百万部売れたということですが、瀬戸内さん自身も、面白いと思ったら原文を読んで頂戴と言っているのです。なかなか読めない源氏と格闘することで、源氏の世界の深みに潜り込んで行く、ということが必要だろうと思うのです。今日は光源氏の人生、そこだけで一時間になってしまいました。あと光源氏の子孫達の物語になります。これはフランスの二十世紀小説にも匹敵するといので、ブルーストだとか、そうした人達の文学が引合いにされるような、ちょっと今までの世界とは違ったような感觸の世界です。源氏は故人となつていたのですけれど、その子孫達が、向き合おうとすれば向き合おうとするほど背中合せになつてしまうという、そういう無明長夜（むみょうぢやうや）の世界といひましようか、わびしい人生がこれから開けて来ます。源氏の子孫達がどういう生き方をしたかということを見ることによって、逆に光源氏の世界の栄光と悲慘が分つてくるような、そういう世界なのです。興味がありませんでしたらまた別の機会に。今日はこれで。